

令和 8 年度

試験名: 個別学力検査等(後期日程)

【人間学群 障害科学類】

区 分	標準的な解答例又は出題意図
「論述」問題	<p>1. 問題文の選定・出題理由</p> <p>本論述問題では、障害科学に関連する日本語の文章を読ませ、内容に関連した質問に文章で解答させ、受験生の応答性、論理性などを評価するものとした。</p> <p>今回は、「公益財団法人東京都人権啓発センター TOKYO 人権 「障害の社会モデル」が導く共生へのヒント」を題材として取り上げ、一部改変して用いた。</p> <p>障害の社会モデルは、障害者の困難を個人の能力ではなく社会や環境の側に原因があると捉え、制度や設計を見直す考え方である。社会では障害の有無に限らず、誰もが何らかのマイノリティ性を持ち、社会の設計次第では不利な立場に置かれ得ると本文で述べられている。合理的配慮とは特定の人を優遇することではなく、そうした社会的障壁や偏りを調整・改善し、すべての人が力を発揮しやすい環境をつくるための考え方であること、その考え方の必要性が投げかけられている。</p> <p>問1では、あなたが考えるマイノリティ性にはどのようなものがあるか、この文章以外の具体例を二つ取り上げ、説明させることで、質問への応答性を評価することとした。問2では、社会モデルの視点から、制度や意識などの障壁や偏りに気づき、それを改善していくために、あなたはどのような貢献ができると考えるかを受験生に問い、受験生の考えを説明させることで、論理的に思考し、発言する能力を論理性として評価することとした。</p> <p>問1. あなたが考えるマイノリティ性にはどのようなものがあるか、この文章以外の具体例を二つ取り上げ、説明しなさい。</p> <p>マイノリティ性には、社会の多数派とは異なる立場に置かれることによる不利が含まれる。例えば、私が考えるマイノリティ性の一つは、ひとり親家庭である。経済的負担や子育ての責任を一人で担う状況により、就労や社会参加の機会が制限されやすい。もう一つは、日本に住む外国にルーツを持つ人や日本語が母語でない人である。言語の壁や文化の違いにより、教育や就労、地域社会との関わりに困難を抱えることがある。(193文字) ※200字程度想定</p> <p>問2. 社会モデルの視点から、制度や意識などの障壁や偏りに気づき、それを改善していくために、あなたはどのような貢献ができると考えますか。問1で取り上げた具体例のうち1つを選び、あなたの考えを述べなさい。</p> <p>社会モデルの視点では、困難の原因は個人の能力ではなく、社会の側にある制度や環境の不備にあると考える。日本に住む外国にルーツを持つ人や日本語が母語でない人が直面する困難も、日本語のみで提供される行政情報や学校での支援体制の不足など、社会の仕組みに起因する部分が多い。言語が十分でないこと自体が問題なのではなく、多言語対応が進んでいないことや「日本語ができて当たり前」という意識が障壁となっている。</p> <p>私にできる貢献は、まずその前提を問い直し、多様な背景をもつ人がいることを前提とした行動を心がけることである。例えば、やさしい日本語を使う、必要に応じて翻訳アプリや資料を活用するなど、日常的な配慮ができる。また、学校や職場で多言語情報の整備を提案したり、地域の日本語支援ボランティアに参加したりすることも可能である。小さな行動であっても、社会の側の壁を低くする積み重ねが、包摂的な環境づくりにつながると考える。</p>

さらに重要なのは、当事者の声に耳を傾け、その意見を制度改善につなげる姿勢である。一方的に「支援する」のではなく、何が障壁になっているのかを共に考える対話が必要だ。私は、授業や職場の話し合いの場で多様な言語背景を前提とした配慮の必要性を提起し、周囲の意識を少しずつ変えていきたい。個人の努力だけに負担を押しつけない社会を目指し、自分の立場から継続的に行動していくことが、社会モデルの実践につながると考える。(604文字) ※600字程度想定